

あとがき

衝撃の時は、総合チームのミーティングの直後のことだった。年度末のそれが3月11日1時に始まり、議事の確認を行い、2時すぎに研究室へ。直後の大地震だった。経験したことのない揺れ。本棚から書籍が落下し、散乱した。あれから3週間、余震は未だに続き、震災の全貌は不明である。被災地（岩手、宮城、福島など）の惨状にどのような支援がありうるのか、心の痛みと困惑のなかで、この記事を書いている。

ミーティングでは、懸案の2012年度全カリ改革に向けたカリキュラム案の確認がなされた。学部提供科目が出揃い、関連して総合Aの科目群が再編され、全カリ委員会に提出する案が大枠で認められた。

改革案は2年間の議論の成果物で、将来社会を担う学生を、学士課程教育、初年次教育の位置づけを明確化する過程でいかに育てていくかが議論の出発にあった。時代の変化の予感とその背景にあった。ICT技術の向上、流動化が進む労働市場と雇用不安、人口減少社会の到来（少子高齢化）、一億総介護時代への突入、そして喫緊のエネルギー・環境問題への接近、等々。学生は、こうした問題を抱えた社会の担い手として、卒業する。

振り返れば、社会が直面している課題は、かつて予測しえないことではなかった。見直しの必要な時期がくるとの憶測はあった。それらが意外と早くに、一挙に今、眼前にある。

2012年度改革には、山積する課題を考え、解決の方向を示すことができる学生を育てるという内容がもりこまれている。古典文献を学ぶ授業を並べ、学部講義からディシプリンを伝える授業の提供がある。総合科目は、新たに再編設計された。

改革はそれとして重要であるが、日々の教育活動と並行して進む。総合チームに所属したわたしは、言語チームの改革の取り組みには大枠の理解しかないが、言語教育のそれはいち早く行われ、本誌ではつとにその成果が迅速に紹介されている。本号ではとくに学習支援の細かな体制に関わる座談会形式の報告と社会情報教育研究センター（CSI）の意欲的な授業展開に関する紹介が興味をひく。

東日本大震災の影響で大学の2011年度前期の授業開始は5月6日と予定され、異例の事態となった。新年度は2012年度改革の最後の足固めの時期である。全カリの言語教育、総合教育の日々の授業は、困難があっても未来に向かって揺るぎなく継承されていく。

岩崎 俊夫（いわさき としお）
（本学経済学部教授／全学共通カリキュラム運営センター
広報委員（総合教育科目構想・運営チームメンバー））